

映画用脚本

『あの夜から』

作 黒石作戦#13

登場人物

現在

杉崎真一 (男・32)	ホラー小説家
杉崎未奈子 (女・32)	杉崎真一の妻
杉崎香菜 (女・6)	杉崎真一の娘 (小学校一年生)
降旗 (男・32)	杉崎真一の友人
小山内 (男・33)	同右
都築三郎 (男・41)	出版社社員
店長 (男・55)	書店「白風堂」店長

回想

杉崎真一 (男・16)	高校二年生
北原 (女・16)	杉崎真一の同級生
降旗 (男・16)	同右
小山内 (男・17)	同右

○山中の道路

林の中を一台のライトバンが走る。
車体には、「(株)石沢建設」の文字。
他には人も自動車も通っていない。

ライトバンの中には、灰色の作業着姿の二人の男。
ハンドルを握る寺島、助手席で咳をしている主任に、

寺島「ああ、いいですよ、無理に思い出さなくても」

主任「うん」

寺島「でね、結局そいつ、吹雪の中二時間、俺の部屋の前で待ってたんですよ、荷物全部抱えて。俺が戻った時、鼻なんか若干つらら垂れてましたから。それで、今度は俺もさすがに悪いと思ったから、そいつに……」

主任、激しく咳き込む。

寺島「大丈夫ですか？」

主任「咳は止まらないが」うん。さっきからね、何か急にこの(喉の)辺が……。ああ、大塚君だ」

寺島「大塚？」

主任「思い出した、昨日この車使ったの。別に何も言っていなかったけどね」

寺島「そうですか？」

主任「やっぱりおかしい？」

寺島「ええ……」

そう言って寺島、足元のペダルを気にしている。

寺島「すみませんけど、ちよつとその辺で停めてみていいですか？」

×

ライトバン、道端に停車している。

ボンネットを開ける寺島。

主任は近くに立って咳をしている。

寺島、エンジンを点検しながら、

寺島「そう言えば主任、聞きました？ どうしてあそこ、今ごろ取り壊しなのか？」

主任「さっきの学校？ この前、村長が代わったからじゃないの？」

寺島「だから、どうして前の村長がずっと壊さなかったかってことですよ。だって、あの学校、閉鎖してから二〇年近くそのままになってたってことでしょうか？ 建物、半分腐ってたじゃないですか」

主任「うん」

寺島「どうもね、出るらしいんですよ」

主任「出る？」

寺島「幽霊」

主任「！」

主任、一際激しく咳き込む。

寺島「大丈夫ですか？」

主任、うなずくが咳は止まらない。

寺島、エンジンを覗き込み、

寺島「どうも、オイルじゃありませんね。……それって、この辺じや相当有名な話みたいですよ。だからこの仕事、ウチなんかが取れたのも、そのせいじゃないかって。確かに言われてみればあそこ、何か変な感じしませんでした？ 何か見られてるって言うか。(ふざけて) ああ、もしかしたらこれ(車の不調)も、それかもしれないですね。あそこから、何かヤバイものがついてきちゃって……」

ふと気付くと、主任の咳が聞こえない。

音の消えた林の中。

頭上のボンネットに視界を遮られ、寺島には周囲が見えない。

寺島「主任？」

返事はない。

体を起こそうとした寺島の背後で、

ぴしゃ

濡れた物音。

ふいに寺島、なにかが自分の背中を見ていることに気付く。

それは明らかに主任ではない。

寺島「(恐怖)……」

音もなく動き、その〈なにか〉は寺島の近くを通過してゆく。

恐怖に身動き出来ない寺島。

〈なにか〉、止まった気配。

寺島「……」

突然、轟音を響かせてバイクが道を走って行く。

寺島「！」

我に返った寺島、恐る恐るボンネットの下から体を起こす。

寺島「主任……？」

主任はいない。

寺島、周囲を見回すが、主任の姿はどこにもない。

寺島「(大声で)主任!?!」

返事はない。

寺島「……」

寺島、ふと気付く。

ライトバンの脇。

主任の立っていた箇所路面だけが、びっしりと水に濡れている。

○ メインタイトル

『あの夜から』

○ 東京都心

繁華街。

大通りに大型書店「白風堂」がある。

○ 大型書店「白風堂」・催事スペース

売場の一角に掲げられた看板。

『虚空の森』刊行記念 杉崎真一先生サイン会

新刊ホラー小説『虚空の森』が大量に平積みされている。

それを買いたい求め、列を作る大勢の客たち。

多くは若い女性。

席に着いた作家・杉崎真一(32)、次々と差し出される本にサインをしてゆく。

しかし、その手つきも、ファンの激励に応える言葉もどこかぎこちない。

自分の番になった一人の若い女性ファン、期待の表情で、

ファン「あの……。やっぱり、今度のこのお話も実話なんですか?」

杉崎「実話?」

ファン「はい。今までの本は二冊とも、杉崎先生自身の実際の体験だって聞き

ました。だから、もしかして今度のこれも——」

杉崎「(慌てて)いえ、違います。全部僕の創作です。これも、今までのもの」
ファン「えっ、でも……」

女性ファン、がっかりした顔。

杉崎「思わず恐縮」どうもすみません」

近くにいた出版社社員・都築三郎（41）、そんな杉崎を見て呆れ顔。

○同・事務室

席で雑誌を読んでいる店長（男・55）。

サイン会を終えた杉崎と都築が入って来る。

店長「ああ、杉崎先生、お疲れ様でした」

都築「駄目ですよ店長、『先生』なんて十年早い。私、今も説教してるところなんですから」

都築、杉崎に、

都築「だから、さっきの質問してきた女の子。杉崎さんも知ってるでしょ、

ネットとかの噂。『杉崎真一の書くホラーは全部実話だ』って」

杉崎「ええ」

都築「それは、それだけ小説が真に迫ってるってことなんだからさ。ああい

う時は、あんな夢を壊すようなこと言っちゃ駄目だよ。もっと怪しく

ニヤツと笑って『さあ、君はどう思う？』くらいのこと言えなきゃ」

杉崎「ええ……」

都築「ん？」

杉崎「でも、今までのが全部実話だったら僕、二回死んで七人殺してなきや

いけないってことになりますけど……」

都築「いいんだよ、それで。ホラー作家なんだから、むしろそのくらいの営業努力は当然だよ」

杉崎「……」

応接用ソファーに座る都築。

杉崎も遠慮がちに腰を下ろす。

ソファーにやって来た店長に、

都築「それでね、店長。このセンセイ、最近ちよつとゴネてるらしいんですよ」

杉崎「慌てて）いえ、そんなことはありません」

都築「次回作。今度暮れにホラーのフェア打つんで、長編が無理ならアンソロジー用の短編でもって、ウチの編集がせっついてるんですけどね。

でも、いつもネタ切れだとか何とか言って、これがなかなか」

店長「(杉崎に)じゃあ、いよいよ恋愛物ですか？」

都築「恋愛物？」

店長「これ」

店長、持っていた雑誌を都築に渡す。

杉崎の写真付きインタビュー記事が掲載されている。

店長「たまたまホラーの賞取ってデビューしたけど、本当は恋愛物や青春物が書きたいんだって」

都築「えっ、そうなの？ そりゃ、聞き捨てなりませんね」

記事を読み始める都築。

杉崎「(大いに慌てて)いえ、本当はとか、そう言うことではなくて……」

店長「まあ、私個人としてはぜひ読んでみたいと思うんですよね、先生の恋愛物。でも、何と言いますか、本屋のオヤジの立場から言わせていた
だくと……。ねえ？」

杉崎「……」

○ 杉崎一家の住むマンション・外観(夜)

東京郊外のマンション。

○ 杉崎家・ダイニング(夜)

和室に座り込んだ杉崎の娘・香菜(6歳小学生一年生)、小さなリュックサックの中を熱心に点検している。

香菜「ねえ、お母さん。カメラちゃんともった？」

杉崎の妻・未奈子(32)、隣のダイニングで食事中。

未奈子「さつき見たじゃない。そっちは後でいいから、早くごはん食べちゃいなさい。まだ途中でしょ」

香菜「もうちよっと」

未奈子の隣に座った杉崎、箸を止めたまま宙を見つめ、じっと何かを考えている。

未奈子「あなたも」

杉崎「(気付いて) ああ……」

笑う未奈子。

杉崎「何？」

未奈子「最近、少し時間があるとすぐに考え込んでしまって。何だか本物の作家
みたい」

杉崎「一応、本物の作家だけど」

未奈子「本当に？ 今日もまた、部長さんから電話あったよ。会社戻る気になつたら、いつでも大歓迎だつて」

杉崎「そう……。うん、それもありがたな」

未奈子「何言ってるの。あんなすごい送別会開いてもらったのに。(考え事は)次回作のこと？」

杉崎「(うなずき)やっぱりホラーだつて。恋愛小説とまでは言わないから、せめて誰も死なない話書きたいんだけどな」

未奈子「でもやっぱり、すぐには難しいんじゃない？」

香菜が和室から、

香菜「お父さん、また、こわいお話かんがえてるの？」

杉崎「うん」

香菜、駆け寄つて来て、

香菜「わたし、いいお話知ってるよ。むかし学校であつた話。このまえ、岡部先生がおしえてくれた」

杉崎「学校……」

香菜「うん。あのね、第二小学校の場所つて、むかしはお墓だつたの。それでね、学校をつくるときに、お墓をたくさんこわして……」

興奮して話し出した香菜に、

未奈子「ほら香菜、お話は後。ちゃんと座つてごはん食べちゃいなさい」

香菜「えー。でも、お父さんがききたいっていったんだよ」

未奈子「後で。早くごはん食べて寝ないと、明日遊園地で眠くなつちゃうですよ」

香菜「だいじょうぶ」

そんなやりとりの横で、

杉崎「(つぶやく)学校か……」

杉崎の耳に、激しい雨の音が聞こえてきて――

○「イメージ」ある学校の校舎(夜)

激しい雨が窓ガラスを叩く。

古びた木造校舎。

夜の暗い廊下。

無人。

雨音に混じり、どこからか不快な音が聞こえてくる。

それは金属同士が擦れ合うような〈音〉。
真っ直ぐに、闇の中へと続いている長い廊下。
〈音〉は、その奥の方から聞こえている。

○ 杉崎家・和室(夜)

布団で寝ている未奈子と香菜。

杉崎、二人を起こさないように押入れの中を探り、一冊の古びたアルバムを見つけ出す。

そこに貼られているのは彼の高校時代の写真。

休み時間の教室、修学旅行の京都、体育祭の校庭……。

ページをめくっていった杉崎、目的の写真を見つけたらしく、手を止めて微笑む。

未奈子が寝返りをうつ。

杉崎「!」

慌ててアルバムを伏せる杉崎。

しかし、未奈子は目覚める様子がない。

杉崎、安堵の吐息。

○ 同・仕事部屋(夜)

執筆記机に向った杉崎、アルバムからはがしてきた写真をコルクボードに留める。

そこに写っているのは制服姿の一人の女子高校生。

雪景色の中、カメラに向かって優しく微笑んでいる。

杉崎、写真を見つめて、

杉崎「……」

ペンを手にした杉崎、原稿用紙に向かって書き始める。

「あの夜より前、僕は彼女について何を知っていただろうか」

ナレーション「あの夜より前、僕は彼女について何を知っていただろうか」

【お断り】

以下の文中にある「ナレーション」は、全て「現在」の杉崎真

一の声によるものとします。

○ 「回想」長野県高瀬市の風景

日本アルプスを間近に望む山間の町。
小さな市街地を田園地帯が囲んでいる。
ナレーション「まだ、世界地図にはソ連が存在し、僕の花粉症が始まる前、一九八九年。長野県のある小さな町でのことだ」

○「回想」高瀬高校

町はずれにある公立高校。

コンクリート造の新しい校舎。

ナレーション「その年、僕は高校二年生」

春、新学期が始まるころ。

時期の遅い桜の花の下を、大勢の生徒たちが登校して行く。

ナレーション「そう書くと、何か爽やかでひたむきな少年を想像する人も多いかもしれない。一九八〇年代後期、日本アルプスの麓で青春を過ごした純朴な高校生」

○「回想」同・屋上

放課後。

高校二年生の杉崎（16）、数人の男子生徒と共にダベっている。
だらしないう姿。

ナレーション「しかし、そんなイメージがただの幻想に過ぎないことは、実際にソレだったこの僕自身が一番よく知っている」

退屈そうに手摺にもたれ、下を見る杉崎。

眼下の校庭では、大勢の生徒たちが部活動に励んでいる。

ゴロをトンネルした野球部員に、

杉崎「太田、今日も絶好調だな！ それなら五〇歳までには県大会行けるんじゃないか！？」

野球部員「うるせえ、帰宅部！ お前ら目障りだから、さっさと帰れよ！」

杉崎「帰宅研究会！ 言ってるだろ、帰宅は実は奥が深いんだよ！」

杉崎の隣にいた降旗（16）、調子を合わせて、

降旗「略して『キタケン』、よろしくねー！」

近くでイビキをかいていた小山内（17）、その騒ぎにムクツと起き上がるが、すぐにまた寝てしまう。

○「回想」同・二年三組教室

英語の授業中。

教師「はい。では、ここまでのところを読んで下さい。最初の段落を……」（見

直し）北原さん」

北原「はい」

指名されて立ち上がったのは、現在の杉崎が見ていた写真の少女・北原（16）。

そつなく教科書を読み始める。

ナレーション「彼女は僕の同級生。でも、その時の僕はまだ、彼女と話をしたこともなければ、きっと彼女の下の名前すら知らなかったはずだ」

杉崎、自分の席でボーっとしている。

教科書を読み終えた北原、着席。

教師「はい。よく予習していますね。では次を……」

その時、何かが床に落ちる音。

杉崎、音の方を見る。

北原が床からペンを拾い上げている。

それは、高校生には不似合いな古風な万年筆。

北原、拾った万年筆を大切そうにハンカチで拭く。

○【回想】通学路

小さな商店街。

集団で下校する杉崎ほか男子生徒たち。

それを北原が自転車で追い抜いて行く。

話に夢中の杉崎たち、誰も北原に気付かない。

ナレーション「彼女、北原についてよく知らなかったとしても、そのことで僕を薄情だとか、異性に興味がなかったとか、そんなふうには決して思わないで欲しい」

×

田園地帯の道。

北原が自転車で軽快に走る。

×

○【回想】高瀬高校・二年三組教室

昼休み。

それぞれ仲間同士で机を寄せ合い、昼食をとっている生徒たち。ナレーション「なぜだろう。とにかく北原はクラスの中で、目立つということ

とは全く無縁の存在だった」

杉崎と数人の男子生徒たち、カセットコンロで焼肉をしている。
突然、火災報知器のベルが響く。

杉崎たち、室内にこもった煙を散らそうと慌てて、

降旗「ほら、だから俺がヤバいつて言ったのに！」

杉崎「うそ！ お前だろ、豚肉なら平気だって言ったの！」

教室中を巻き込んだの大騒動。

ナレーション「当時の同級生たちに尋ねてみても、きっと返ってくるのは、ほ

とんどがこんな答えになるはずだ。『彼女がそこにいたことは覚えてい
るけれど、彼女が何をしていたかは思い出せない』

一人で食事をしていた北原、騒ぎを苦笑して見ている。

ナレーション「でも……」

○「回想」高瀬市の夏

山間の町の夏の風景。

○「回想」山道

強い日差し。

うるさいほどのセミの声。

ナレーション「それは、その年の八月一七日。なぜか全国基準よりずっと短い、

僕らの貴重な夏休みが終わる一週間前」

二台の原付バイクに分乗した杉崎、降旗、小山内、大きな荷物を
背負って走って行く。

降旗と小山内は私服だが、杉崎は制服のワイシャツ姿。

ナレーション「その日、僕は同じクラスの降旗、小山内と一緒に、ひと山越え

た隣村・脇坂村へと出かけて行った」

二台の原付バイク、溪流に架かった大きな橋を渡る。

○「回想」脇坂中学校旧校舎・外観

山の中。

林に囲まれた古い木造校舎。

校門の石柱の間には鎖が渡され、「危険・立入禁止」の札が下げ
られている。

その脇に、自転車を停めて立っている北原（学校の制服姿）。

二台の原付バイクが近付いて来る。

杉崎たち三人、北原の前でバイクを降りて、

降旗「ごめんごめん。こんなに（時間が）かかるとは思わなかった」

北原「ううん。芳恵、病気なの？」

降旗「うん。どうも、食あたりみたい」

降旗、北原の顔色をうかがうように、

降旗「本当にごめんね、あいつのせいで急に変なこと頼んじゃって。ゆうべ、

北原に電話かける前、他の奴らにも聞いたんだけど、みんな忙しいとか何とか……、（慌てて）あっ、別に、北原が暇だとか、そう言うこと

じゃなくてさ」

北原「笑って）ううん、本当に今日は何も予定なかったから」

降旗「そう？」

北原「うなずき）それに私なら、家もすぐ近くだし」

降旗「ああ、うん……。 （杉崎に）ほら、北原、中学（こ）だから」

杉崎「急に振られて）ああ、うん……」

降旗「……」

会話が途切れる。

気まずい雰囲気。

降旗「……じゃあ、とりあえず行こうか？」

○「回想」同・校舎内

古びた木造の建物の中。

閑散とし、現在は使われていないことが分かる。

窓を乗り越えて入って来る杉崎、北原、降旗、小山内。

ナレーション「そこは一年前に閉鎖された脇坂中学校の旧校舎。老朽化が進み、

その時には、ただ取り壊しを待つばかりになっていた」

沢山の荷物を抱えた四人、「図書室」の札の掛かったドアに入っ
て行く。

○「回想」同・図書室

閲覧席の机で、杉崎と北原が向い合って勉強している。

杉崎、教科書を示して、

杉崎「（こ）は？」

北原「（見て）これも過去完了形。（こ）の単語、過去分詞も同じだから」

杉崎「(納得) ああ……」

しばし二人、それぞれのノートに向うが、

北原「……ねえ、やっぱり変だよな？」

杉崎「えっ？」

北原「あの事件。だって、二人とも一度も外に出ていないんだよ。それなのに、あの凶器のナイフだけが部屋の中からなくなってるなんて……」

杉崎「……」

降旗「はい、カット！ OK！」

降旗、三脚に据えたビデオカメラ（筐体の大きな初期の家庭用カメラ）を杉崎たちに向けている。

杉崎「今度はちゃんとスイッチ押したな？」

降旗「おう、任せろ」

彼らの周囲には、本が運び出されて空になった本棚が並んでいる。

からんだマイクのコードに苦戦している小山内に、

降旗「おい、小山内、寝るな。カメラ動かすぞ」

小山内「寝てないって」

北原は、コピー用紙の台本を手にセリフの確認をしている。降旗、極めて適当にカメラ位置を決めて、

降旗「はい、じゃあ次、ここから。北原一人で次のセリフ全部。いい？」

北原「うん」

杉崎「俺は？」

降旗「休み。ウロウロしないで静かにしてろ」

降旗、遠慮がちに北原に、

降旗「じゃあ、またテストからね。大丈夫？」

北原「うん」

降旗「じゃあいくよ。よいい、スタート！」

北原「全ての証拠を合わせて考えれば、答えは一つ。安藤君も本当は気付いてるんでしょ？ あの部屋、他に誰かいたんだよ。二人の他にもう一人、きっと誰か別の人がいて——」

ふいに北原、セリフを中断。

北原「……」

降旗「え？」

北原「あつ、ううん。この『誰かいた』ってセリフ」

北原、室内を見回し、

北原「そう言えばここに、ちょうどそういう怖い話があったなって……」

小山内「(不安)怖い話?」

降旗「ここって、この部屋?」

北原「うん……」

しかし北原、すぐに笑って、

北原「ごめんね。今度はちゃんとやるから。降旗君、もう一回テスト、いい?」
降旗「ああ、うん」

北原、台本でセリフを確認する。

真剣な表情。

それを何気なく見た杉崎、

杉崎「(ハッとする)」

北原の横顔に目を奪われる。

杉崎「……」

ナレーション「そう、きっと全てはあの廃校舎で始まったのだろう」

○ 杉崎家・仕事部屋(夜)

コルクボードの北原の写真。

ナレーション「北原。彼女が僕を変えた」

原稿用紙に向って書き続けている杉崎。

ナレーション「あの廃校舎で彼女と過ごした夜、謎と恐怖に満ちたあの夏の夜から、きっと僕の人生は、今僕が立っている場所へと向って大きく向きを変え始めたのだ」

手を止めた杉崎、書き上げた分の原稿を満足げに眺める。

杉崎「(つぶやく) 御要望にお応えして、最新作は実話です」

時計が午前四時を指している。

息をついた杉崎、北原の写真を外し、原稿用紙と一緒に机の引き出しにしまう。

○ ある民家・外観(朝)

住宅地。

広い庭のある一戸建。

小鳥がさえずる爽やかな朝。

○同・廊下(朝)

縁側のようになった廊下。

窓を開けた主婦、庭に一匹の野良猫がいることに気付く。

主婦「おはよう、今日は一人？ 待っててね、今、何かいいもの持ってくるから」

奥の部屋に戻りかけた主婦、ふと足を止めて振り返る。

庭の野良猫、主婦には見向きもせず、じっと庭の一点を見つめている。

主婦「？」

主婦のいる場所からは、野良猫のしているものは見えない。

窓辺に戻った主婦、野良猫の視線を追う。

主婦「！」

庭の隅。

ブロック塀の角に向って、灰色の作業着の男が一人うずくまっている。

顔を伏せ、膝を抱えて体を出るだけ小さくして。

主婦「あの……」

男、反応しない。

サンダルを履いて庭に降りた主婦、ためらいながら男に近付いてゆく。

主婦「あの……」

男の作業着からは水がしたたっている。

野良猫、威嚇の声を上げて逃げて行く。

男の肩を叩こうとする主婦。

その時、突然いましめを解かれたかのように、男の体がぐにやりと地面に横たわる。

主婦、男の顔を見て、

主婦「(驚愕)！」

○遊園地

賑わう園内。

杉崎、未奈子、香菜、絶叫マシンなど様々な遊具で遊ぶ。

その楽しい様子。

親子三人の笑顔。

×
メリーゴーランドに乗った香菜、手を振り、
×
香菜「お母さん、早く。とまっちゃう！」
未奈子「はい」

柵の外に立った未奈子、香菜に向けてカメラのシャッターを切る。

未奈子の横でアクビをしている杉崎。

未奈子「帰り、私が運転しようか？」

杉崎「大丈夫」

未奈子「そう？」

杉崎「何か動いてればね。じっと椅子に座ってたりすると寝ちやうけど」

未奈子「笑って」やっぱり私が運転するよ。ゆうべ、どのくらい書けたの？」

杉崎「二八枚」

未奈子「そんなに？」

杉崎「多分、長めの短編って感じになると思うから、だいたい三分の一ってところかな」

未奈子「今度は何人殺すの？」

杉崎「えっ？」

未奈子「ホラーでしょ？」

杉崎「まあ……」

未奈子「違うの？」

杉崎「いや、違いはしないけど……」

未奈子「何？ あっ、もしかして何か、私に言えないような話書いてる？」

杉崎「(ドキッ)」

そこに、メリーゴーランドを降りた香菜が駆けて来て、

香菜「お母さん、ちゃんととれた？」

未奈子「(カメラを示し) ばっちり」

香菜、未奈子の手を引いて、

香菜「じゃあ、次あっち」

未奈子「えっ、香菜、さっきこれが済んだらお昼にするって言ったじゃない？」

香菜「いま、スーパーズリルライドが空いてるのが見えたの。だから早く」

香菜、駆け出して行く。

未奈子「ちよつと、香菜、待ちなさい」

香菜「(振り返って) 早く！ お父さん！」

顔を見合わせて笑った杉崎と未奈子、香菜を追って歩き出す。

○ 杉崎家・和室(夜)

布団で寝ている香菜。

遊園地で買ってもらったらしきヌイグルミを抱いている。

その横の未奈子、香菜に本を読んでいて自分も一緒に眠ってしまった様子。

部屋に入って来た杉崎、未奈子を優しく揺すって、

杉崎「未奈子、自分の布団で」

未奈子「うん……」

夢うつつで布団に入る未奈子。

杉崎、二人の布団を直して部屋の明かりを消す。

○ 同・仕事部屋(夜)

北原の写真をコルクボードに留めた杉崎、原稿用紙に向う。

執筆再開。

ナレーション「その日の夕方、映画の撮影が終わったのと雨が降り出したのと

は、ほとんど同時だった」

○ 「回想」 脇坂中学校旧校舎・図書室(夕方)

小山内「(怯えて) えっ、今(こ)こで?」

窓の外は激しい雨。

電気のない室内は、すでにすっかり薄暗くなっている。

部屋の片隅にまとめて置かれたビデオカメラや荷物。

閲覧席に杉崎、北原、降旗、小山内が座っている。

降旗「何か、不都合でもあるか?」

小山内「でも、それって、この部屋の話なんだよね?」

北原「大丈夫。怖いって言っても、本当にどこの学校にでもあるような話だから」

小山内「うん……」

杉崎「何ならお前、一人で先帰ってもいいんだぞ」

降旗「ああ、その代わり原チャリ置いてけよ。風邪ひかないようにな」

小山内「……」

北原「じゃあ、いい?」

小山内「(しどろしどろうなずく)」

北原、声を落として話し始める。

北原「私なんかが入学するずっと前からね、この図書室には誰かがいるって噂があったの。『図書室の誰か』。目には見えなくて声も聞こえないんだけど、ここには絶対誰かがいるって……」

○「北原の話」脇坂中学校の怪談①

校庭。

運動会が賑やかに行われている。

トラックを走るリレーの選手。

全校の生徒が大きな声援を送る。

そんな中、一人だけ皆とは逆を向き、校舎の方をじっと見ている女子生徒A。

女子A「……」

隣の女子生徒Bがそれに気付き、

女子B「亜紀？」

女子A「……図書室。誰かこっち見てる」

女子B「えっ？」

女子A「誰か、すごく怖い目……」

女子B「……？」

校舎の隅に位置する図書室の窓。

太陽の光がガラスに反射し、室内をうかがうことは出来ない。

げんな顔の女子生徒B。

しかし、一際大きくなった歓声に目をトラックに戻す。

それでも女子生徒Aは、じっと図書室の窓を見つめたまま。

北原の声「最初のころは、ごく一部の人たちにしか分からなかったんだって。

でも、そのうちにいろいろ変なことが起こるようになって、話がどん

どん広がっていったの」

○「北原の話」脇坂中学校の怪談②

北原の声「例えば……」

昼休みの図書室。

自習の生徒たちで混雑している閲覧席。

貸出カウンターの中からそれを見ていた図書委員たち、気味悪

そうに、

図書委員 A 「(小声) ほら、また」

図書委員 B 「うん……」

図書委員 A 「やっぱり、いるんだって、『図書室の誰か』」

図書委員 B 「ちょっと、やめてよ……」

二〇席ほどある閲覧席。

びっしりと埋まり、周囲には立っている生徒もいるが、なぜか一つだけ不自然に席が空いている。

北原の声 「テスト前とかで、どんなに混んでる場合でも、必ずどこか一つ席が空いてるんだって。なぜかみんな、そこだけは避けて座ろうとしないぞ」

○「北原の話」脇坂中学校の怪談③

放課後の図書室。

窓から差し込む夕陽。

北原の声 「あとそれから、これは私の部活の先輩のお姉さんが体験したことなんだけど……」

本棚の間で、女子生徒 C が一人で本を読んでいる。

室内には他に誰の姿もない。

入口のドアを開け、年配の男性教師が入って来て、

教師 「ああ、まだいたのか」

女子 C 「すみません、あとちょっとだけいいですか？」

教師 「うん。じゃあ、あと鍵掛けなきゃいけないから、お前たち、終わったら職員室に言いに来いよ」

女子 C 「はい」

教師、出て行く。

女子生徒 C、読書に戻るが、

女子 C 「えっ……」

×

×

図書室前の廊下。

歩き去ろうとしている教師。

ドアから女子生徒 C が駆け出して来て、

女子 C 「(顔が真っ青) 先生、何で!?! 何で『お前たち』なんですか!?!」
教師 「えっ?」

女子C 「先生、私、一人ですよ！ 何で『お前たち』なんですか!？」

教師 「(戸惑い) 何でって……。ただ、もう一人、お前と一緒に」

女子C 「いません!」

教師 「ん？」

教師、ドアから図書室内を見回す。

誰もいない。

教師 「首を傾げて) ああ……。それで、用事の方はもういいのか？」

女子C 「(怯えて) ……」

泣きそうな表情の女子生徒C。

呆れ顔の教師、ドアを閉め、鍵束の鍵をドアに差しして、

教師 「何だ？ 例の『図書室の何とか』ってヤツか？ お前、確か三年だろ？」

もう子供じゃないんだから、そんなオバケみたいな信じてギャーギ

ャー言ってる——」

ガチャ、という音。

見ると、ドアに差したはずの鍵束が床に落ちている。

教師 「？」

鍵を拾い、ドアに差そうとする教師。

しかし、ふと気付く。

ドアノブが、かすかに回り始めている。

教師 「……!」

女子C 「先生……」

ゆっくり回ってゆくドアノブ。

女子生徒Cと教師、息を詰めて見る。

ドアノブ、止まる。

女子C ・教師 「……」

バン! と、ドアが内側から叩かれる。

誰かが平手で叩いたような音。

女子C ・教師 「!」

バンバンと内側から連打され、二人の前で激しく揺れるドア。

女子C 「先生!」

とっさに教師、ドアノブを掴んで鍵を掛けようとする。

しかし、激しい揺れのために上手くいかない。

女子C 「先生、早く! 出て来ちゃう! 出て来ちゃう! 出て来ちゃう!」

教師、必死でドアを押さえ、どうにか施錠する。

その瞬間、ピタリと止まるドアの揺れ。
急に静まり返った図書室の前。

女子C・教師「……」

二人、呆然として立ち尽くす。

○「回想」脇坂中学校旧校舎・図書室(夕方)

閲覧席の杉崎たち四人。

沈黙に雨音だけが響いている。

降旗「……それで？」

北原「終わり。(笑って) どう、怖かった？」

降旗「強がり) いや、まあまあかな。(杉崎に) なあ」

杉崎「(こちらも強がり) うん」

降旗、わざと明るく話題を変えて、

降旗「それで北原、そろそろ時間だけど本当に帰る？」

北原、外の雨を見て、

北原「迷って) うん……。でも、七時前には親から電話かかってくるから家

にいないと。降旗君たちは？」

降旗「俺たち、カメラとか濡れるとまずいから、もう少し待っけど」

北原「そう？ でも早くしないと、すぐ夜になっちゃうよ」

降旗「うん。でもまあ、何とかなるでしょ」

小山内「ねえ……」

降旗「ん？」

小山内「(真剣な顔) 降旗、何で、そこ座ってるの？」

降旗「え？」

小山内「(指さして) だって、ここ、席一つ空いてるのに……」

閲覧席の机は四人掛け。

そこにいる全員が同じ机に着けるはずだが、なぜか降旗は席を

一つ空け、隣の机の椅子に座っている。

降旗「(口ごもり) 何でって……。偶然だよ、偶然」

杉崎たち「……」

部屋の隅々から漂うように迫る夕闇。

ふいに一同、

一同「ぞっとする」……」

○「回想」同・生徒玄関(夕方)

下駄箱の前に、杉崎たち四人がやって来る。

降旗「いいの、本当に？」

北原「うなずいて」自転車走って、すぐにお風呂入っちゃうから」

降旗「大変だね、留守番。いつまで？」

北原「明日。ウチの親、まだ来年なのに、もう受験生扱い。お前は一人で勉強してろって」

北原、玄関のドアを開ける。

北原「じゃあ、お先にごめんね。今日、面白かった」

降旗「ううん、こちらこそ。どうもありがとう」

北原「じゃあね」

雨の中を走り去って行く北原。

降旗、杉崎たちに、

降旗「さて。じゃあ、何か使えそうなものでも探すか、懐中電灯とか」

杉崎「ああ。どこかその辺探せば、置き忘れくらいあるだろ」

小山内「懐中——って何で？」

降旗「場合によっちゃ、今夜ここに泊まりだからさ。ああ、だからお前、嫌なら先に帰っていいって」

小山内「……」

降旗「分かったら、ほら、行くぞ」

降旗、嫌がる小山内を押して歩き出す。

杉崎「合宿だ、合宿。『キタケン』の緊急夏合宿」

笑って玄関ドアを閉めようとした杉崎、外の校門脇で自転車に乗ろうとしている北原に気付く。

杉崎「……」

北原、杉崎に気付いて大きく手を振る。

杉崎、つられて手を振り返す。

二人、そのまま何となく見つめ合う。

雨が降る。

廊下から降旗が振り返って、

降旗「どうした？」

杉崎「慌てて」いや、何でもなく」

北原、自転車で走り去って行く。

杉崎「……」

見送る杉崎。

○「回想」同・ある教室（夜）

窓の外は漆黒の闇。

降り続く激しい雨。

どこかで見つけたらしき懐中電灯の光の中、杉崎と降旗がビデオカメラで昼間の映像のチェックをしている。

降旗、ファインダーを覗いてニヤニヤと、

降旗「うん、いいよ、お前のこの間抜け面。それでこの後、確か……、あつ」

杉崎「もう切れた？」

降旗「うん」

そう言って降旗、カメラからバッテリーを取り出す。

降旗「遅いな、小山内」

杉崎「お前さ、もしかして、わざとバッテリー忘れた？ 小山内に取りに行かせようとして？」

降旗「驚いたふり」えっ、まさか。心外だな。俺がそんなことするように見える？」

杉崎「うん。思い切り」

廊下を走る慌てた足音。

降旗「笑って」おっ、噂をすれば……」

ドアから転がるように駆け込んで来る小山内。

何とか平静なふりをしようとするが、その顔は真っ青。

降旗「どうした？」

小山内「えっ？」

降旗「バッテリーは？」

小山内「とぼけて」バッテリー？ ああ、そうか。何か忘れてると思ったら……」

降旗「何かあって、じゃあ、お前、他に何しに行ったんだよ？」

小山内「……」

降旗「図書室までは行ったのか？」

小山内「だって、暗かったからさ……」

降旗「そりゃまあ、夜だからな。じゃあ、お前、『図書室の誰か』よろしく伝えてくれなかったんだ」

小山内「……」

杉崎「降旗に）あんまりいじめるなよ。トラウマになっても知らねえぞ。で、
バッテリーどこ？」

降旗「貸出カウンターの机の上。ああ、悪いね」

杉崎「便所のついで」

そう言って立ち上がった杉崎、小山内の持っていた懐中電灯を
受け取って、

杉崎「ああ、そうだ。小山内、お前も一緒に行くか？」

激しく首を横に振る小山内。

杉崎、笑って教室を出て行く。

○「回想」同・男子トイレ（夜）

闇に包まれたトイレ。

水道から水が出ずズボンで手を拭いた杉崎、ふと気付く。

いつの間にか雨音に混じり、どこからか金属同士が擦れ合うよ
うな音が聞こえている。

杉崎「……？」

杉崎、耳を澄ます。

それは、「イメージ」の中で聞こえていた、あの〈音〉。

杉崎「……」

杉崎、妙な胸騒ぎ。

○「回想」同・廊下（夜）

不快な〈音〉が響く。

トイレから出て来た杉崎、周囲を見回す。

そこは、「イメージ」に登場した長い廊下。

激しい雨が窓ガラスを叩く。

〈音〉は、廊下の奥の方、闇の中から聞こえている。

杉崎「降旗？ 小山内？」

返事はない。

杉崎「……」

懐中電灯を握り直す杉崎。

〈音〉に引き寄せられるかのように廊下を歩いて行く。

○「回想」同・図書室の前（夜）

長い廊下の突き当たり。

そこにあるのは図書室のドア。

半分開いている。

歩いて来た杉崎、足を止める。

〈音〉は、ドアの中から聞こえている。

杉崎、ドアの隙間を覗き込むが室内はよく見えない。

杉崎「……誰か、いる？」

それに答えるように〈音〉が止む。

杉崎「(恐怖)……」

立ちすくむ杉崎。

しかし、意を決してドアを開ける。

○「回想」同・図書室(夜)

入って来た杉崎、懐中電灯を手に、慎重に室内を見て回る。

閲覧席。

本棚の間。

しかし、どこにも異常はない。

あの〈音〉の音源は見当たらない。

杉崎、最後に残った貸出カウンターの中へと足を踏み入れる。

事務机や棚などが雑然と置かれたカウンター内。

机の上に、ビデオカメラのバッテリーがある。

杉崎「(あっ……)……」

杉崎、バッテリーを取ろうと手を伸ばす。

びしゃ

足元で濡れた物音。

見ると、杉崎の片足は床に出来た水たまりに踏み込んでいる。

杉崎「……？」

窓はどこも開いておらず、天井にも雨漏りの様子はない。

懐中電灯の光の中、水たまりの表面は黒く光り、少しずつ広が

っているようにも見える。

杉崎「(恐怖)……」

思わず後ずさる杉崎。

その時、背後で、

女の声「杉崎君？」

杉崎「(驚愕) うわあっ!?!」

○「回想」同・ある教室(夜)

降旗「(呆れて) ……で?」

北原(私服姿) がいて、降旗と話している。

北原「私が声かけたら杉崎君、驚いて壁に頭ぶつけちゃって……。ごめんね。

こっちの部屋に移ってるって知らなかったから」

杉崎、後頭部を押さえて、

杉崎「(バツ悪く) うん……」

降旗「それで北原、留守番の方は?」

北原「さつき、親から電話かかってきちゃったから、今夜はもう大丈夫」

その横で小山内、食べ物の沢山入った袋を手に、

小山内「ねえ北原、これ、もらっちゃっていいの?」

北原「うん、食べて。家にそのくらいしかなかったんだけど、足りそう?」

小山内「もう、全然」

降旗「全然どっちだよ」

小山内、答えず、すでにパンを頬張っている。

降旗「あつ、お前、それ全部食うなよ」

降旗も慌てて袋に手を伸ばす。

北原、杉崎にパンを差し出し、

北原「これ、杉崎君も。お腹空いたでしょ?」

杉崎「うん……」

北原「(苦笑して) もう許してよ。この雨の中、せつかく持って来たんだから」

× ×

数脚の机を寄せ合った四人、缶飲料を飲みながら話している。

ナレーション「その時、何を話したのかは良く覚えていない。でも、僕たち男

三人、きっと少なからず緊張していたはずだ。夜、こんな山の中でク

ラスの女子と一緒。しかも相手は、それまでほとんど話したこともな

かった北原……」

四人、どことなくぎこちない雰囲気。

降旗「……でき、店何軒も回って散々迷って、結局、お前の方が高いセータ

ー買ったんだよな?」

小山内に同意を求める降旗。

しかし小山内は、いつの間にか座ったまま寝ている。

降旗「……」

小山内のイビキ。

一同「……」

降旗、おずおずと北原に、

降旗「俺たち、そろそろ寝ようかと思うんだけど、北原、どうする？」

○「回想」同・外観(夜)

雨が上がり、雲間から月が出る。

○「回想」同・ある教室(夜)

教室の隅で荷物を枕にして寝ていた杉崎、目を覚ます。

隣で同じように寝ている降旗と小山内。

体を起こした杉崎、周囲を見る。

窓辺の席に北原が座っている。

杉崎には気付かず、窓の外を見ている北原。

月明かりに照らされたその横顔。

杉崎、しばし見とれる。

杉崎「……」

北原、ふと視線に気付き、

北原「(照れて) ああ……」

杉崎「うん……」

気まずい杉崎、立ち上がって、

杉崎「まだ、いたんだ」

北原「うん。ちょっと感傷に浸ってた。ここね、中学三年の時の私の席」

杉崎「この教室？ その机も？」

北原「うん」

杉崎「へえ……」

北原「……」

会話が途切れる。

ぎこちない雰囲気。

北原「降旗君って、いつも、ああいうことやってるの？」

杉崎「ああいうこと？」

北原「映画」

杉崎「ううん。兄貴がカメラ買ったから使ってみたかっただけ。また、どう

せ完成する前に飽きるよ」

北原「そう？ でも私、すごく面白かったけどな、あの台本」

杉崎「えっ……」

北原「？」

杉崎「実はさ、あれ書いたの俺。降旗に頼まれて」

北原「そうなの？」

杉崎「うん」

北原「(感心)へえ、すごい。杉崎君、ああいうの好きなの？」

杉崎「うん、まあ……」

北原「へえ……」

杉崎、少しためらうが、

杉崎「実はさ、俺、いつか小説を書きたいなんて思ってた……」

北原「小説？ 小説って杉崎君、将来作家になるの？」

杉崎「なるって言うか、なりたい。……ああ、いや、本当にただの夢なんだけど」

北原「ううん、そんなことないよ。そうか、作家か……」

そう言って何か納得した様子の北原、ポケットから出したものを杉崎に差し出す。

北原「じゃあ、これ」

それは、高校での授業中に彼女が使っていた万年筆。

よく手入れされており、月明かりに輝いている。

杉崎「？」

北原「あげる」

杉崎「えっ？」

北原「これ、杉崎君が持ってた。私が持ってるより、小説を書くのに使ってもらった方が、このペンもきつと嬉しいと思う」

杉崎「でも……」

北原「いいでしょ？」

杉崎「うん……」

北原「はい」

万年筆を渡す北原。

杉崎、ためらいつつも受け取る。

北原「それに私……。今夜のことをずっと覚えていて欲しいから」

杉崎「えっ……？」

北原、答えず静かに微笑む。

杉崎「……」

ナレーション「将来は作家になりたい。何だか馬鹿にされそうで誰にも言ったことのなかったそんな夢を、僕はなぜ北原には素直に話すことが出来たのか？　そして北原は、ずっと大切にしていたはずの自分のペンなぜあんなふうに僕にくれたのか？　あれから十数年が経った今になっても、僕にはその理由が良く分からない」

万年筆を見ていた杉崎、気付く。

教室の外、どこか遠くから音が響いてくる。

先ほど図書室の中から聞こえていた、あの不快な〈音〉。

身をこわばらせる杉崎。

北原も気付いて、

北原「(気味悪そうに)何……？」

〈音〉が響く。

降旗たちを起こそうと、

杉崎「降旗……」

言いかけた杉崎、ハッとす。

北原が杉崎の手を握っている。

不安そうな顔の北原。

杉崎「……」

杉崎、北原の手を強く握り返す。

ナレーション「でも、一つだけ確かなことがある。それは、もしあの夜、あの教室に北原がいなければ、僕の人生は今とは全く違ったものになっていたということだ。……そう、あの夜、彼女と初めて二人で話したあの時から、きっと僕の人生は、今僕が立っている場所へと向って大きく向きを変え始めたのだ」

〈音〉が響く。

月光の中、互いをかばうように寄り添う杉崎と北原。

○ 杉崎家・仕事部屋(朝)

原稿用紙の文字。

「今僕が立っている場所へと向って大きく向きを変え始めたのだ。」

杉崎、執筆の手を止める。

カーテンの隙間から差し込む朝の光。

大きく息をついた杉崎、満足げに原稿を眺める。

しかし、ふと、

杉崎「えっ……？」

杉崎、考えて、

杉崎「あの音、結局何だった……？」

首を傾げた杉崎、何気なく両手を見る。

真っ赤な血がこびり付いている。

杉崎「！」

驚いて自分の体を見る杉崎。

どこにも傷はない。

気付くと、手に付いていたはずの血も消えている。

杉崎「……？」

勢い良くドアが開き、香菜が部屋に駆け込んで来る。

香菜「お父さん、おはよう。またテツヤ？」

杉崎「笑って」うん、また朝になっちゃった。香菜はもう朝ごはん済んだの？」

香菜「うん。わたし、もう学校いくよ。あつ、お父さん、この人だれ？」

杉崎「え？」

香菜、コルクボードの北原の写真を指さしている。

杉崎「(慌てて) ああ、それは……」

言いかけた杉崎、ドアの所で未奈子が見ていたことに気付く。

杉崎「(バツ悪く) ……」

未奈子、香菜に、

未奈子「それはね、香菜、お母さん」

香菜「お母さん？」

未奈子「だから、香菜のお母さん。この杉崎未奈子さん」

香菜「えっ？」

未奈子「そう。お母さんが高校生のころ」

香菜「ええっ!？」

香菜、しげしげと写真を見て、

香菜「うそ！」

未奈子「嘘じゃないよ。香菜が生まれるずっと前」

香菜「ほんと？」

未奈子「本当。じゃあ今日、香菜が学校から帰って来たら、もっと別の写真も

見せてあげる。だから、早く学校行く支度しなさい。今日は給食袋持って行く日だよ」

香菜「うん！」

香菜、部屋を出て行く。

未奈子、窓のカーテンを開けながら、

未奈子「笑って」それで、どういうことなの？」

杉崎「いや、ちよつと……。この（写真の）ころのことでも書いてみようかなと思つて……」

未奈子「でも、ホラーでしょ？ あつ、もしかして、今度殺されるの私？」

杉崎「違ふよ、ちゃんと実話。脚色なし」

未奈子「ふうん。でも、そんな怖い話なんてあつたっけ？」

杉崎「とぼけて」さあ？」

未奈子「本になつてからのお楽しみ？」

未奈子、かつての自分の写真を見て、

未奈子「ねえ、私、そんなに変わった？ 気持ちとしては一応、このころのままなんだけど」

杉崎「気持ちとしてはね」

杉崎をにらんだ未奈子、原稿用紙の上に置かれた万年筆に気付く。

それは、「回想」で彼女が杉崎に渡したもの。

大切に使われてきたらしく、まだ輝きを失っていない。

未奈子「それ、もういい加減にやめたら？ 原稿読みにくいってみんな言うてるし、やっぱりワープロの方が楽でしょう？」

杉崎が書き上げた原稿には、沢山の修正の跡がある。

杉崎「うん……」

杉崎、改めて万年筆を手に取り、

杉崎「でも、いいだろ、別に」

未奈子「嬉しい」うん。いいんだけど」

二人、顔を見合せて笑う。

開いたドアから、香菜が咳き込む音が聞こえてくる。

杉崎「どうした？」

未奈子「昨日、遊園地ではしゃぎ過ぎたのかな。今朝はちよつと調子悪いみたい」

杉崎「学校、大丈夫か？」

未奈子「休んでもいいよって言ったんだけど、熱はないし、今日は函工の続きがあるから絶対に行くって……」

杉崎「そう……」

続いている香菜の咳。

○ 横浜みなとみらい地区・実景

快晴の港町。

その一角に大きなショッピングモールがある。

○ ショッピングモール・正面入口

杉崎と降旗（32）がいる。

降旗「相変わらず汚い字だな。……おい、この『降旗』って、俺の名前、実

名かよ？」

杉崎「ああ、別に問題ないだろ？」

降旗「ないだろって、お前……。高校の時の何のこと書いたんだ？ 今、若い女性を中心に人気を集める新鋭イケメン小説家って、そんないい加減なことでもいいのか？」

杉崎「うるさいよ。で、それ（原稿）、とりあえず当事者としての感想を言うて欲しいっていうのと、あとちょっと聞きたいこともあってさ」

降旗「昼飯、当然……」

杉崎「分かってるよ」

二人、ショッピングモールの中に入って行く。

降旗「で、何年ぶり？」

杉崎「斉藤の送別会以来だろ？ 五年……。いや、もっとか」

降旗「お前、どうも気付いてないみたいだけど、もう三〇（歳）も過ぎたんだからさ。少しは渋さとか貫禄とか、そういうもん身につけようとは思わないの？」

杉崎「お前が言うか？」

降旗「いやいや」

降旗、自分の出かかった腹を示して、

降旗「俺なんて、ほら。なかなかのもんだよ」

苦笑する杉崎。

○同・喫茶店

ほぼ満員の店内。

窓際の席に着いている杉崎と降旗。

降旗、読んでいた原稿をテーブルに置き、

降旗「終わった」

杉崎「どう？」

杉崎、笑って、

杉崎「懐かしいだろ、我らが青春の日々。……で、細かい苦情は後で聞くとして、それ、読んでの通りラストがまだなんだけどさ。あの変な音つて結局何だったんだっけ？ 覚えてる？ お前と小山内、あの時は寝てたけど、後で話しただろ？」

降旗「……」

杉崎「話したって。おい、少し腹が出たからって、ボケるにはまだ早いぞ」

降旗「……」

降旗、暗い表情。

杉崎「降旗？」

降旗「お前さ、何でこんなもの書くの？」

杉崎「えっ？」

降旗「何で今さら、こんなデタラメ……」

杉崎（驚き）「デタラメ？ どこが？」

答えず、黙り込む降旗。

杉崎「……」

突然、降旗が咳き込み始める。

杉崎「どうした？」

咳は止まらない。

周囲の客が迷惑そうに見ている。

降旗「悪い、すぐ戻る」

杉崎「うん」

席を立った降旗、店を出て行く。

見送り、原稿を手取る杉崎。

そこに突然、あの〈音〉が聞こえてくる。

金属が擦れ合う不快な〈音〉。

杉崎「！」

杉崎、ハツとして――

○「イメージ」 脇坂中学校旧校舎・図書室の前(夜)

激しい雨が窓ガラスを叩く。

長い廊下の奥、突き当たりにある図書室のドア。

半分開いている。

その中から響く〈音〉。

ドアの前に、現在の(三二歳の)杉崎が立っている。

ドアの隙間を覗き込むが室内はよく見えない。

立ちすくむ杉崎。

○ ショッピングモール・喫茶店

ハッと杉崎、我に返る。

もう〈音〉は聞こえていない。

杉崎「(幻聴?)……」

その時、彼の視界の隅を一瞬、何か大きな影が通過する。

杉崎「？」

杉崎、周囲を見るが何も変わったことはない。

杉崎「……」

近くのテーブルで、若いカップルが話している。

男 「……ねえ。今の、人？」

女 「人？」

男 「今の。落ちてったの」

女 「えっ？」

男 「……」

恐る恐るという様子で男、席を立ち、杉崎の横に来て窓から下を見る。

杉崎、男の視線を追う。

彼らがいる喫茶店は建物の三階。

下の路上に人だかりが出来、その中央に誰かが倒れている。

降旗である。

杉崎「!」

降旗、奇妙な形に手足を広げて動かない。

杉崎「(愕然)……」

降旗の体が濡れていたのか、その周りの路面にゆっくりと染み

が広がってゆく。

○ 病院・廊下(夜)

蛍光灯に照らされた陰鬱な廊下。

片隅の公衆電話で話す杉崎。

杉崎「……さつき、実家の御両親が着いた。今、降旗の病室にいる。……うん。また後でこっちから電話するから。香菜に、今日は具合悪いんだから早く寝なきや駄目だぞって。……うん。それじゃあ」

電話を切る杉崎。

そこに老夫婦が力なくやって来る。

降旗の両親。

降旗の父「……駄目でした」

杉崎「……」

杉崎、言葉もなく深く頭を下げる。

すすり泣く降旗の母。

降旗の父、しばしうつむいていたが、

降旗の父「あの、杉崎さん……」

杉崎「はい」

降旗の父「さつきですが、あいつ、最後の最後に気がついて一言だけ喋ったんです。『お前、杉崎についてきたのか?』って」

杉崎「ついてきた?」

降旗の父「ええ。いきなり目を開けて、はっきりそう言いました。『お前』って、

私らや医者の方のことじゃなかったみたいです。これ、どういうこ

とかわかりますか?」

杉崎「……」

○ 電車の中(夜)

病院からの帰り道。

座席でぼんやりしている杉崎。

単調に響くレールの音。

杉崎、無意識につぶやく。

杉崎「ついてきた……」

自分の言葉にハッと、周囲を見回す杉崎。

誰もいない。

終電間際の車内には彼一人だけ。

杉崎「……」

夜の街を電車が走って行く。

○ 高瀬市の風景(夕方)

「回想」にも登場した日本アルプスの山並みが夕陽に染まっ
ている。

○ 降旗家・外観(夕方)

市の郊外に建つ古い大きな民家。
降旗の通夜が行われている。

○ 同・仏間(夕方)

弔問者に挨拶をする降旗の両親。
痛ましいその姿。
部屋の隅に控えている杉崎。
その彼を、戸口に顔を出した吉村聡美(32)が手招きする。

○ 同・庭(夕方)

庭の片隅で話す杉崎と聡美。
聡美「じゃあ、理由、全然分からないんだ……」
杉崎「うん。屋上の駐車場にいた人の話だと、降旗、しばらく一人で立っ
ただけ、いきなり走り出してそのまま手摺を越えたって……」
聡美「店を出て行く時、変じゃなかったの？」
杉崎「別に。本当にすぐ戻って感じだった」
聡美「そう……。でも何か変だよね、二人続けてなんて」
杉崎「二人？」
聡美「あれ、杉崎君、知らない、小山内のこと？ ……あいつ死んだよ」
杉崎「えっ？」

×
インサート。 ×

前出の民家の庭。

ブロック塀の角に向ってうずくまっていた男の体が、ぐにやり
と地面に横たわる。

それは、林の中で消えた「石沢建設」の主任Ⅱ小山内（33）。
醜い死人の顔。

×

×

聡美「この前の日曜日だから、五日前かな。高瀬公園の近くの何とかさんつて家の庭に入り込んで死んでたって……」

杉崎「(シヨック)……」

聡美「あいつも何か、普通の死に方じゃなかったらしいんだよね。遺体、まだ警察から返ってきてないみたいだし」

杉崎「何かあったの？」

聡美「私も聞いた話なんだけど、あいつ、その死んでるの見つかる一週間くらい前に、脇坂の方の山の中で行方不明になってたんだって」

杉崎「脇坂？」

聡美「ほら、あいつ、長野に出て建設会社に勤めてたでしょう。その会社が今度、脇坂中学の旧校舎を取り壊すことになったんだって。それで、部下の人と一緒にその下見に行った帰りだったらしいんだけど……」

杉崎「……」

杉崎の携帯電話が鳴る。

杉崎「……ああ、ちよつと。(電話に出て)もしもし」

しかし、通話はすぐに切れてしまう。

携帯電話の表示画面を見て、

杉崎「ウチから。娘が風邪ひいちゃって、未奈子、今回は留守番」

聡美「えっ？」

再び携帯電話が鳴る。

杉崎「(出て)もしもし」

香菜(電話)「もしもし、お父さん？」

杉崎「香菜？ どうしたの？」

香菜(電話)「あのね、お父さん、おくすりがなくなっちゃった」

杉崎「お薬？ お母さんは？」

香菜(電話)「いないよ」

杉崎「えっ？」

香菜、電話の向こうで咳をして、

香菜(電話)「お母さんがね、何かこまっていたことがあったら、お父さんにでんわしなさいって」

杉崎「お母さん、どうした？」

香菜（電話）「お出かけ。学校に行くっていった」

杉崎「学校？ 学校って、香菜の学校？」

香菜（電話）「ううん。お母さんの学校だって。ゆうべ、小山内さんっておじさんから電話がかかってきてね、それでお母さん、すぐに行かなきゃって」

杉崎「小山内さん？」

香菜（電話）「うん。お父さんのお友だちだっていった」

杉崎「……」

香菜（電話）「お父さん、わたし、ゆうべちゃんと一人でねたんだよ。ちゃんと

おフトン……」

そう言った香菜、咳き込む。

杉崎「香菜、大丈夫？ じゃあ、お父さんが今、お母さんの携帯に電話してみるから、ちよつと待ってて。いいね？」

返事の代わりに激しい咳の音。

電話が切れる。

杉崎「……」

杉崎、気になるが、未奈子の携帯電話に電話をかける。すぐに相手が出て、

杉崎「ああ、未奈子……」

しかし、聞こえてきたのは、あの〈音〉。

杉崎「!!」

杉崎、ハツとして――

○「イメージ」 脇坂中学校旧校舎・図書室の前（夜）

激しい雨が窓ガラスを叩く。

半分開いた図書室のドア。

その前で立ちすくんでいる現在の（三二歳の）杉崎。

鳴り続けていた〈音〉が止む。

意を決した杉崎、ドアを開けて図書室の中に入って行く。

暗い室内は「回想」のまま。

杉崎、貸出カウンターの中を覗き込む。

カウンターの中、机の脇に倒れている現在の（三二歳の）未奈子。

○ 降旗家・庭(夕方)

杉崎「(驚き) 未奈子!?!」

我に返る杉崎。

携帯電話の通話はすでに切れている。

聡美が心配そうに見ている、

聡美「杉崎君……?」

杉崎、門に向かって走り出す。

聡美「杉崎君!?!」

いつの間にか暗くなっていた空から雨が降り出す。

○ 山道(夜)

激しい雨。

一台の乗用車が坂道を上って行く。

運転しながら携帯電話で話している杉崎。

山中で電波状態が悪いらしく、

杉崎「もしもし、聞こえますか? ……娘です。娘が今、一人で部屋に……。

もしもし? そちらの合鍵で入ってもらって構いませんので、行って

様子を——」

気付くと、ガードレールが目の前に迫っていて、

杉崎「!」

慌ててハンドルを切り、衝突を避ける杉崎。

再び携帯電話に、

杉崎「もしもし?」

しかし、表示画面には「圏外」の文字。

携帯電話を放り出す杉崎。

あせりの表情で道を急ぐ。

乗用車、渓流に架かった大きな橋(「回想」で原付バイクが渡つ

た橋)を渡る。

○ 脇坂中学校旧校舎・外観(夜)

闇の中、林に囲まれた古い木造校舎。

「回想」のころより、ずっと荒廃が進んでいる。

校門の横には解体工事を予告する看板。

豪雨の中、杉崎の乗用車が到着する。

車を降りた杉崎、敷地内に走り込んで行く。

○ 同・校舎内(夜)

多くの窓ガラスが割れ、荒れ果てた校舎の中。
懐中電灯の光を頼りにやって来た杉崎、何かを蹴飛ばす。
見ると、それは古びた飲料の空き缶。
杉崎の横、開いたドアの中は、かつて彼らが一夜を過ごしたあの教室。

(空き缶は、「回想」で杉崎たちが飲んでいた飲料のもの)

杉崎「……」

杉崎、先を急ぐ。

○ 同・図書室の前(夜)

長い廊下の奥。
突き当たりにある図書室のドア。
半分開いている。
やって来た杉崎、その前で足を止める。
雨の音以外には何も聞こえない。

杉崎「……」

ためらう杉崎。
しかし、意を決してドアを開ける。

○ 同・図書室(夜)

入って来た杉崎、貸出カウンターの中を懐中電灯で照らす。
誰もいない。
しかし、机の脇、「イメージ」で未奈子が倒れていた場所に、何か小さなものが落ちている。
近付いて見る杉崎。
落ちていたのは、あの万年筆。
かつて未奈子からもらい、彼が執筆に使っているはずのもの。

杉崎「……？」

万年筆を拾おうとする杉崎。

その時、机の陰から白い手が伸び、杉崎より先に万年筆を掴む。

杉崎「……」

万年筆を握って机の陰に隠れる白い手。

杉崎「……未奈子？」

杉崎、慎重に進み、机の陰に懐中電灯を向ける。

そこにいたのは高校生の未奈子。

杉崎「!？」

高校生の未奈子、ぐったりと机の脚に寄りかかって座っている。

その服装は、あの夏の夜のもの。

全身ずぶ濡れで、頭部の傷から大量に出血している。

動ける状態ではない。

杉崎「愕然」……」

まるで別の時空間にいるかのように、未奈子は杉崎に気付いていない。

未奈子、助けを呼ぼうとするが声が出ず、手に持った万年筆で

近くのスチール製ロッカーを擦り始める。

金属同士が擦れる音が響く。

あの〈音〉。

杉崎「(驚愕)！」

懐中電灯の光の輪の中、懸命に万年筆でロッカーを擦り続ける

未奈子。

それを呆然と見ていた杉崎、何かに気付いて、

杉崎「!」

バシッ、と懐中電灯の電球が破裂する。

○「二六年前」**脇坂中学校旧校舎・ある教室(夜)**

あの夏の夜。

外は激しい雨。

懐中電灯の光の中、杉崎と降旗がビデオカメラで昼間の映像のチェックをしている。

降旗「うん、いいよ、お前のこの間抜け面。それでこの後、確か……、あっ」

杉崎「もう切れた？」

降旗「うん」

そう言って降旗、カメラからバッテリーを取り出す。

降旗「遅いな、小山内」

杉崎「お前さ、もしかして、わざとバッテリー忘れた？ 小山内に取りに行

かせようとして？」

降旗「驚いたふり）えっ、まさか。心外だな。俺がそんなことするように見える？」

杉崎「うん。思い切り」

廊下を走る慌てた足音。

降旗「笑って）おっ、噂をすれば……」

ドアから駆け込んで来た小山内、部屋の隅に向ってうずくまりガタガタと震え始める。

顔を伏せ、膝を抱えて体を出来るだけ小さくして。

その怯え方は普通ではない。

杉崎と降旗、真顔で歩み寄って、

降旗「小山内……？」

小山内、うわ言のように、

小山内「図書室……」

降旗「えっ？」

小山内「図書室、図書室、図書室、図書室、図書室……」

その時、雨音に混じり、どこからかあの〈音〉が聞こえてくる。

気付いた杉崎たち、恐怖。

降旗「何だよ……」

夜の校舎に〈音〉が響く。

○「二六年前」同・図書室の前（夜）

半開きの図書室のドアの中から聞こえる〈音〉。

懐中電灯を手にやって来た杉崎、足を止める。

ドアの隙間を覗き込むが室内はよく見えない。

杉崎「……誰か、いる？」

それに答えるように〈音〉が止む。

杉崎「（恐怖）……」

立ちすくむ杉崎。

突然、ドアの中から激しい咳の音。

杉崎「……」

○「二六年前」同・図書室（夜）

杉崎が入って来る。

貸出カウンターの中。

机の脇、スチール製ロッカーの近くに未奈子が倒れ、激しく咳き込んでいる。

頭部の傷から出血し、その全身は雨でずぶ濡れ。

手には、あの万年筆が握られている。

杉崎「(驚き) 北原!？」

のたうち苦しむ未奈子。

杉崎、どうしていいか分からない。

やがて息を詰まらせた未奈子、そのまま動かなくなる。

杉崎「……北原?」

目を閉じ動かない未奈子。

杉崎、恐る恐る未奈子の手首を探るが、脈を見つけることが出来ない。

杉崎「(愕然) ……」

ドアから、降旗に付き添われて小山内が入って来る。

降旗、未奈子を見て絶句。

小山内、呆然と、

小山内「俺がバッテリー取ろうとしたら、北原、いきなり後について、俺、それで絶対『図書室の誰か』だと思って、俺、北原だと思わなくて……」

未奈子が持って来たらしき食べ物に混じり、床にバッテリーが落ちている。

杉崎が拾い上げてみると、それはべったりと血で濡れている。

小山内「北原、死んだの……?」

杉崎「(うなずく) ……」

降旗「……」

小山内、ずるずると座り込む。

外は激しい雨。

○「二六年前」同・同(夜)

雨が上がり、窓から月の光が差し込んでいる。

未奈子を前に、呆然と座り込んでいる杉崎たち。

やがて、降旗がポツリと、

降旗「これ、埋めるか……」

杉崎と小山内、顔を上げる。

降旗「今日、一人で留守番だって言ってたろ。それに、もし誰かに話してたとしても、俺たちが『来なかった』って言えばそれまでなんだから……」

杉崎・小山内「……」

立ち上がった降旗、未奈子の腕を持ち、

降旗「小山内、そっち（未奈子の脚）」

小山内、座り込んだまま動かない。

降旗「小山内！」

激しく首を横に振る小山内。

それを見ていた杉崎、無言で立ち上がり、未奈子に掛かった降旗の手を払う。

降旗「驚いて」……」

杉崎、そっと未奈子の顔の血を拭い、髪を整える。

動かない未奈子。

杉崎「……」

やがて杉崎、静かに未奈子の体を抱いて立ち上がる。

降旗、気おされて見ていたが、

降旗「じゃあ、この裏の林な。俺たち、何か道具見つけて行くから」

杉崎、部屋を出て行く。

○「二六年前」同・廊下(夜)

図書室から続く長い廊下。

窓からの月光に照らされ、未奈子を抱いた杉崎が歩いて行く。

○「二六年前」同・裏の林(夜)

大きなクヌギの木の近く。

深い穴が掘られ、その底に未奈子が横たえられている。

その手には万年筆が握られたまま。

降旗がスコップを使い、穴に土を放り込んでゆく。

その横で杉崎、スコップを持って立ち尽くしている。

手を止めた降旗、杉崎に言い聞かせるように、

降旗「しょうがないって。こうしないと小山内、殺人犯なんだし、俺たちだって多分、何か共犯とか……」

杉崎「……」

小山内は、穴から離れた場所で安心して座り込んでいる。

降旗「そりゃかわいいそうだけど、北原、もう、どうしようもないんだからさ……」

杉崎「……」

降旗「でも、俺たちは生きてて、まだこれからなんだし……。お前だって将

来、何かやりたいこととか、なりたいたいものとかあるんだろ？」

杉崎「……（微かにうなづく）」

降旗「だからさ、早く。小山内も呼んで来るから」

そう言っただけで降旗、小山内の所に向う。

杉崎、自分の手に目をやる。

両手にこびり付いた未奈子の血。

杉崎「……」

決心し、スコップで土をすくう杉崎。

その時、弱々しく、

未奈子「杉崎君……」

杉崎、手を止める。

穴の底、まだ土から出ていた未奈子の顔。

その目が開いて杉崎を見つめている。

杉崎「!!」

未奈子は生きている。

杉崎がしようとしていることを知り、その目は悲しみに満ちている。

杉崎「(愕然)……」

離れた場所にいる降旗と小山内は、未奈子の声に気付いていない。

体が動かない未奈子、目だけで杉崎をじっと見上げる。

見つめ合う二人。

未奈子の目。

杉崎、その視線に耐えられない。

スコップを握る手が震える。

杉崎「……」

降旗と小山内、何か様子がおかしいと気付いて、

降旗「どうした？」

小山内「(不安) 杉崎……」

杉崎「……」

杉崎、スコップを振るう。

未奈子の顔が土の中に消える。

杉崎「……いや、何でもない」

○「二六年前」高瀬市内の交番前

掲示板に、未奈子の行方不明を告げるポスターが貼られている。

（使われている写真は、現在の杉崎が仕事部屋に貼っていたもの）

夏休みが明けて登校途中の杉崎、それを見ている。

杉崎「……」

逃げるように立ち去る。

○「二六年前」高瀬高校・二年三組教室

晩秋。

窓の外には紅葉の山並み。

英語の授業中。

教科書を読み終えた生徒が着席する。

教師「はい、いいですね。では次を……、野口さん」

生徒「はい」

起立した生徒が教科書を読み始める。

杉崎も自分の席で、懸命に教科書の文章を目で追っている。

教室の中、未奈子の机だけが空席。

○「二四年前」同・校門付近

卒業式の日。

卒業生たちと、それを祝福する下級生たちでこった返している。

卒業証書を手笑顔の杉崎、ふと気付く。

少し離れた場所の金網フェンス。

その外側の道路にひと組の中年夫婦がおり、遠慮がちにこちらを見ている。

同級生の女子生徒が杉崎の耳元で、

女子生徒「（小声）あれ、未奈子のお父さんとお母さんだって」

杉崎「えっ……」

未奈子の母、泣き崩れる。

杉崎「……」

○「二年前」ある居酒屋(夜)

夜の東京の繁華街。

居酒屋で大学生たちがコンパをしている。

盛り上がって騒ぐ大勢の男女。

その中に杉崎(20)もいる。

○「数ヶ月前」ある企業のオフィス

上司のデスクの前に立つ杉崎(32)。

上司「今年度いっぱいで辞める？」

杉崎「勝手なことを言いまして、すみません。でも今は、小説の方に集中してみたいんです」

上司「うん……」

上司、渋い顔だったが、

上司「でもまあ、賞を取って、君の才能を活かすせつかくのチャンスだから

ね。悔いの残らないように精一杯やってみなさいよ」

杉崎(感激)「はい」

○「数ヶ月前」杉崎のマンション・仕事部屋(夜)

パソコンのワープロソフトを使い、執筆作業をしている杉崎。

モニタに向かって一心不乱にキーボードを叩く。

○大型書店「白風堂」・催事スペース

売場の一角に掲げられた看板。

『虚空の森』刊行記念 杉崎真一先生サイン会

席に着いた杉崎、次々と差し出される本にサインをしてゆく。

自分の番になった一人の若い女性ファン、期待の表情で、

ファン「あの……。やっぱり、今度のこのお話も実話なんでしょうか？」

杉崎「実話？」

ファン「はい。今までの本は二冊とも、杉崎先生自身の実際の体験だって聞きました。だから、もしかして今度のこれも——」

杉崎(慌てて)「いえ、違います。全部僕の創作です。これも、今までのもの」

ファン「えっ、でも……」

杉崎「思わず恐縮」どうもすみません」

女性ファン、がっかりした顔で去る。

気を取り直し、サインを続けようとする杉崎。

しかし、次の本はなかなか差し出されない。

ふと杉崎、周囲が静まり返っていることに気付く。

杉崎「……？」

ぴしゃ

濡れた物音。

杉崎、顔を上げる。

目の前に、高校生の未奈子が立っている。

あの夏の夜の服装のまま、全身泥まみれになって。

杉崎「！」

驚愕の杉崎、椅子を蹴って売場の隅へと逃げる。

驚く周囲の人たち。

出版社社員・都築も慌てて、

都築「杉崎さん！？」

音もなく未奈子、杉崎に近付いて来る。

周囲の人たちは誰も未奈子に気付かない。

近づく未奈子。

杉崎、恐怖に身動き出来ない。

さらに近付き、杉崎の前で止まる未奈子。

何かを差し出す。

それは、あの万年筆。

全体がサビで覆われている。

杉崎、ショックに気を失って倒れる。

○「回想」高瀬高校・保健室(夕方)

初冬の夕方。

ベッドで目を覚ます高校二年生の杉崎。

その手には、あの万年筆がしっかりと握られている。

よく手入れされた、表面に傷一つない状態。

杉崎「……」

杉崎、自分がなぜそこにいるのか分からない様子。

周囲を見た杉崎、ベッド脇の椅子に未奈子が座っていることに
気付く。

きちんと冬の制服を着た未奈子、心配そうに杉崎を見ている。
他には誰もいない。

未奈子「大丈夫？」

杉崎「俺……」

未奈子「授業中に、いきなり倒れたんだよ。覚えてない？」

杉崎「うん……」

未奈子「気分は？ どこか痛くない？」

杉崎「(安堵) よかった……」

未奈子「え？」

杉崎「いや」

未奈子「何？」

杉崎「うん……」

未奈子「何？」

杉崎「俺、今、北原を……、北原が死んだ夢見てた」

未奈子「えっ？」

杉崎「いいだろ。だから夢だって」

未奈子「よくないよ。倒れた時、頭打ったんじゃない？ ……でも、ちよつと
嬉しいかな」

杉崎「？」

未奈子「(指さして) それ」

杉崎、自分の頬の涙の跡に気付く。

赤面し、照れ隠しに窓の外を見る杉崎。

曇り空から雪が舞っている。

杉崎「あっ」

未奈子「うん。初雪」

杉崎「……」

未奈子に向き直った杉崎、手にした万年筆を示し、

杉崎「これ、ありがとう。ずっと大切にする」

未奈子「うん」

見つめ合う二人。

未奈子、静かに目を閉じる。

○ 脇坂中学校旧校舎・図書室(夜)

ハッと我に返る杉崎。

現在の図書室、貸出カウンターの中。

雨が上がり、窓からは月光が差し込んでいる。

そこにいるのは杉崎一人だけ。

周囲に異状はない。

懐中電灯を見るが、電球は割れていない。

杉崎「(幻覚だったのか……)」

安堵の息をつく杉崎。

しかし、ふと気付く。

スチール製ロッカーの側面、高校生の未奈子が万年筆で擦っていた箇所。

よく見ると、そこには古い傷がある。

それは、まるで何か擦れたような跡。

杉崎「(息を飲む)……」

○ 同・裏の林(夜)

現在の林の中。

大きなクヌギの木の近く。

杉崎が、必死の形相で地面を掘り返している。

しかし、土の中からは何も出てこない。

荒い息で手を止め、深く掘った穴の中に座り込む杉崎。

静寂。

その時、ふいに穴の側面が崩れ、何かが転がり落ちる。

あの万年筆。

その全体はサビに覆われ、キャップは何か擦れて大きく変形

している。

杉崎「(万年筆を握って)……」

ガタガタと震え出す杉崎。

× ショッピングモールの喫茶店。

降旗「(暗い表情)お前さ、何でこんなもの書くの?」

× ビル屋上から落下し、路面に叩きつけられる降旗。

降旗の通夜。 ×

杉崎「娘が風邪ひいちゃって、未奈子、今回は留守番」
聡美「(不思議そうに) えっ?」

×
民家の庭、ブロック塀の角。
×
ぐにやりと横たわる小山内の死体。

×
遊園地。
×

香菜、駆け出して行く。
未奈子「ちょっと、香菜、待ちなさい」
香菜「(振り返って) 早く! お父さん!」

杉崎を見上げる香菜。
×
こぼれそうな笑顔。
×

月明かりに照らされた廃校舎の教室。
香菜の手を引いた血まみれの未奈子(高校生)、万年筆を差し出し、

未奈子「今夜のことをずっと覚えていて欲しいから」
×

×
高校の保健室。
×
初雪の夕方。

杉崎、目を閉じた未奈子にぎこちなくキスをする。
×

×
徹夜明けの仕事部屋。
×
杉崎に微笑みかける未奈子。
その優しい笑顔。
×

現在の林の中。
×
ガタガタ震えていた杉崎、さびた万年筆を握りしめて、
杉崎「(絶叫) ああああーっ!」

○ 大型書店「白風堂」：外観

○ 同・売場

平積みされている新刊小説。

杉崎真一著『あの夜から』

装丁や添えられたPOPから恋愛小説であることが分かる。

何人もの客がそれを手に取る。

売場の片隅から、その様子を見ている出版社社員・都築と「白風堂」店長。

店長「私も読みましたけどね。いいじゃないですか、恋愛物。あの高校生の

ころ、二人で夜の廃校舎で話す場面なんて、なかなかのもんですよ」

都築「うなずいて」ウチの編集、上から散々怒られました。何でホラーば

っかり書かせてたんだって」

店長「苦笑」

都築「でもまあ、少なくとも今回、あの噂は立ちませんね」

店長「実話だって噂？」

都築「ええ。何しろあのセンチセイ、二枚目で独身だから売れてたって部分も、

かなりあるんですから」

店長「でも、上手いですよ、あの本の結婚してからの部分。娘が生まれて、

小学校に上がって……」

都築「空想で書いたにしては、妙にリアルで実感がこもってるんですよ。

恥ずかしながら私も、あんなに書ける人だとは思ってませんでした」

店長「……惜しいね」

都築「ええ」

店長「本当なの？ 自分の部屋で、あの本の原稿の前に座って死んでたって」

都築「そうらしいですよ。私もいろいろ警察から聞かれましたけど……」

○ 杉崎のマンション

杉崎一家が暮らしていたはずの部屋。

しかし、そこには未奈子の衣類も香菜の玩具もない。

殺風景な独身男性の部屋。

都築の声「何しろ、男の一人暮らしでしょう。訪ねて来る人もいなくて、見つか

かったのは死んでから半月以上経ってからだったって……」

開いた仕事部屋のドアの奥に、背を向けて座った杉崎が見える。

その体は全く動かない。

店長の声「じゃあ、ペンで自分の体をメッタ突きにしたっていうのも？」

都築の声 「いや、私もそこまでは知りませんがね」

杉崎の体、正面は見えない。

都築の声 「でもこれ、ウチの編集の奴が言ってたんですが、原稿、いつもはワ

ープロなのに、今回に限って全部ペンの手書きだったらしいんですよ。

それに、あれだけの長編なのに、直した箇所が一箇所もなかったって

……。これ、何か普通じゃありませんよね？」

杉崎の手を離れ、万年筆が音を立てて床に落ちる。

終